

頭がチーズだったから



静 岡 県

杉^{すぎ} 田^た 知代子^{ちよこ}

私の頭の中は、ふつうの人とはちがうそうです。数字のことや考えるのがうまくできなくてLD（学習障害）というのだそうです。穴だらけのチーズのようなものだって、この前先生がいいました。その説明を聞いていた時も、チーズと聞いた瞬間に、ハンバーガーや、ピザや、本の題名を考え出してしまふ、迷路な頭で、私が穴あきチーズをイメージできるまで、待っていてくれた先生です。

私は体ができあがる前に、紫色のまま、うまれて来ました。たたいても何も言わなかったのです、お医者さんは、私をあきらめたそうです。けれど、もう一回たたいてみたら、「ぐげっ」と息のような

声がして、保育器に入れてもらえることになりました。筋肉もまだできていなくて、注射の針をさすと、さした穴から、注射の液が出て来たり、ミルクは細い管で、鼻から流して入れたそうです。

そして、私は無事、三才になりました。口はちゃんと動いているのに、歩いたりするのができないので、いろんな病院に連れていったけれど、「そのうち歩きますよ。」とか「心配ないですよ。」と言われたそうです。

そして、そのままふつうの幼稚園に行くようになりました。できないことは、たくさんあって、でも先生は、「なんでも、みんなとおなじにできるのよ。がんばりましょう。」と言ってくれました。その頃の運動会の写真を見ると、ほそう具をはいて、先生の手につかまって、必死で歩いています。園庭にいる人たちは、みんな私を見ていました。かわいそうに思っていたのかもしれませんが、私は、ほそう具をつけたら、歩けるようになったので、うれしくて訓練にも通っていました。

幼稚園のことで、おぼえているのはひまわりの絵です。まんなかの種のところから描きはじめたら、花びらの場所がなくなってしまうって、大きな花びらの代りに、小さなバランスの悪い花びらになってしまいました。だから、種のところをがんばろうと、水色が赤でぬりました。茶色のクレヨンの上に、水でといった絵の具が、きれいにはじけてすてきでした。赤か水色の種を持った、そのひまわりを、「のびのび描けている」と児童会館の展らん会に出してくれた先生でした。とてもうれしかったです。私は絵がすきになりました。

小学校になる頃、私の原因不明の体に、やっと診断名がつけました。脳性麻痺^{まひ}です。私は、家にあつた医学辞典で、脳みその写真や、図をながめて、どこがこわれているんだろうと思いました。大人用のその医学辞典をながめてみると、とても楽しかったのをおぼえています。悲しかったり、落ち込んだりすることもなく、そのままふつうの小学校に入学しました。まだ、養護学校は義務教育になつていなかったからなのか、あたりまえに、ふつうの小学校に入りました。学校は楽しくて、体育の間も、先生にてつだってもらつて鉄棒をやりました。家でも練習をしました。手の力がないので、わかつていても、体を持ち上げることができないで、くやしさのあまりに、泣きながら地面をけつたら、その反動で、できた「さか上り」です。勉強は、本当は、まるでできていなかったのかもしれませんが、ランドセルを背中にせおつて、歩く練習や、通学路をおぼえることや、早起きをして、走ることや、そんな毎日を過ごしていたので、成績のことを考えたことはあまりありませんでした。

一年生の授業でおぼえているのは、理科の時間です。外に出て、桜の花びらを五枚ひろつて、ノートに貼るといふのが、その日の理科でした。私は、地面に落ちているものを、しゃがんでつまみ上げるといふ動作が、うまくできなかったのと、花びらがかわいそうなのと、手の中に入れたとたんにくしゃぐしゃになってしまうことが悲しくて、途中で作業が止まってしまい、先生が花びらをひろつてくれました。教室に戻ると他のみんなは、ノートにきれいに花びらをならべていました。私は、セ

ロハンテープで花びらを留めるということが、どうしてもできませんでした。花びらは土の上に落ちて
いるものだと思っているからです。

二年生になる時、足の手術をするために、専門の施設に入りました。学校はとなりにある養護学校
に行くことになりました。小学校を卒業するまでの間、足の手術と訓練は続いたので、私は養護学校
とふつうの学校を行ったり来たりしました。私には、養護学校は楽しいところ、ふつうの学校は恐い
ところでした。勉強や、競争や、行事が多いふつうの学校では、何をやっているかがわからないうち
に、いろんなことが動いていました。先生はやさしく、クラスの人もやさしかったけれど、いっしょ
に遊ぶことはできませんでした。なわとびや、ドッジボール。休み時間の校庭もどうしてわざわざ、
体に危ないことをするのか、よくわかりませんでした。体育の時間も、遠足も運動会も、すわって見
ている方が楽しいのに、それをつたえる方法を知らなくて、棒のように固まったまま、立っていたり
しました。先生たちは困っていたのかもしれませんが。私にはスポーツの意味が今でもわからないので、
こういうところが、穴あきチーズなんだと思います。

養護学校では、計算や、漢字の他に、生きていくための方法を教えてもらいました。学校にいる時
は「先生」がいて、病院では「看護師」さんがいるけれど、大人になったら、ひとりで行動しなけれ
ばならないこと。ひとりになってしまうこともあること。その時のために、毎日がありました。大き
くなったら何になりたいかではなく、自分の体のどんなところがうまくできなく、どんなところは動

いて、そして得意なことは何か。その得意なことでお金をもらうためにはどんな方法があるか。小学校六年生の頃には、真剣に考えていました。そして、同級生の中には、進行性の病気で夏休みや冬休みを最後に会えなくなることがよくありました。大げさな意味ではなく、本当に自分の命の長さや、体が動いているうちに、できる限りのことをする大切さを身につけたと思います。体がふつうに動く人と、動かない私たち。くらべても意味はないこと。そして、何かができないからといって悲しまなくていいこと。何かができるからといって、安心してはいけないこと。信号の渡り方の時にも教えてくれました。信号は外にあつて、病院や施設の中にはないので、そして、手術をくり返している私たちは、外を「歩く」ということも、あまりなかったので、信号を渡るタイミングが、うまくできませんでした。青になったら渡る。赤は止まる。それがわかって、渡り切らないうちに、点めつや、赤になってしまうのです。走って渡り切ることができないので、渡る前に、心の準備と、そして人ごみをさけることと、もしも青でも、無理そうだと思ったら、何度でも、次の青まで待てばいいこと。そして、それでも赤になってしまったら、あわてずに「ありがとう」のおじぎをして、ゆっくりと最後まで進むこと。横断歩道の長さが同じでも、体調によって、進める速さはちがってくるので、この信号の渡り方はとても役に立ちます。考えて、考えてから二度手間にならないように先に進む、私の今の行動パターンも、この信号の渡り方に似ていると思う時があります。ふつうの学校の遠足の時、集団の前の方が信号を渡りはじめ、まんなかの人たちにむかって、「走れ！」と言っていた先生でし

た。ふつうの学校みんなは大変だと思いました。疲れている時でも走るのは大変だからです。

中学は、手術の必要がなくなったので、ふつうの学校に行きました。その中学では、ろうかでも、人が走っていました。ボールも飛んできました。私は自分の教室にたどり着くだけで精いっぱいでした。重いカバンを持って、通学路をまちがえずに歩くだけで、ほとんどの体力を使いました。勉強はもともとわからなかったけれど、勉強どころではありませんでした。ただ静かに教室にいて、いじめられていることも気がつかず、いじめはエスカレートしていきました。給食の中にゴミが入り、パンには鉛筆がささり、スケッチブックはちぎられて、ろうかにばらまかれました。でも「ふつうの学校はこういうもの」と私の頭は思ったのです。ろうかに紙が落ちていたら、すべて危ないのに、元気な人はそうじゃないんだ。ふうん。給食の中身をこぼさないように運ぶのが私には大変なのに、元気な人はそうじゃないんだ、へえ。いつのまに、こんな鉛筆、させたんだろう。すごいな。と思ったのです。だから、泣きませんでした。やられていることの意味が、私の頭にはちがって入ったのです。いじめても反応がないので、おもしろくなかったのか、私は教室のすみで足でけられるようになりました。そんな時も、器用に動く相手の足をみて、なんて素速く動く足なんだろう。だからサッカーが好きなのかな。と思っていたりしました。穴あきチーズの頭の良いところですよ。なやまなかったのです。学校にはふつうに通い続けました。養護学校の中等部ではなくて、ふつうの中学校に通うのが、小学校の時から、私のあこがれでした。だから、教室に居るだけで、私の心は満足していました。先生

のいない所で暴力をふるう、その頭の良さは、養護学校の世界にはないものでした。尊敬さえしました。

先生がいじめのことを知って泣いたのは、修学旅行の班決めの時でした。当番というのではないけれど、なんとなく、私の世話をする係りの人というのがあって、どの班にも入れてもらえなかった私を、その世話係りの男子の班に先生は入れてくれました。修学旅行は荷物があるので、しつかり荷物を持つようと、そうしたのです。そして、次の日、その彼が、私のいじめの作戦を練っているのを、私は聞いてしまいました。知らない土地で、ひとりぼっちにされたら、どうしようと思いました。そして時間割を書く計画帳の先生との日記らんに、いじめられていることを書きました。ただ事実を書きました。計画帳は、先生のコメントがついた後、次の日のホームルームの時に手渡しで返されていました。ところが、私の日記を読んだ先生は、男子の机めがけて、ブーメランのように、計画帳を投げました。きちつとした、英語の女の先生です。大声を出したりしない先生です。その先生の突然の行動に、男の子たちは静まりかえりました。私はいつものように、ただ座っていました。先生は何人かに計画帳を返しおわると、ただだまって、教室のまんなか立っていました。目には涙がうかんでいました。何がどうなったのかと、クラス中が先生を見ました。日記を読んできたのだと、安心していた私です。でももしかしたら、大声でどなるのかもしれないと、ドキドキしていた時、先生は小さな声で言いました。

「先生は悲しい。先生の大好きな、このクラスの中に、堂々とできないで、かくれていじめをしている人がいることが、先生は悲しい」。そしてしばらくまた、だまってしまいました。その日から、ホームルームで、それぞれの「言い分を聞く時間」がつくられました。いじめるには訳がある。いじめられる方にも何か理由がある。それを言葉にしないで、いじめるなんて、中学三年生にもなって、何をしているのかと、先生は言いました。その頃の私はほとんど声を出さないうで、誰とも話さなくなっていたので、私にも責任があると思いました。「まず正直に手をあげなさい。」と先生は男子にむかっていた。先生はみんなを信じているから、自分で言い出してくれると信じているから、いじめに加わった人は、自分でそう思う人は手をあげなさいと言いました。少しづつ手があがりました。私はろうかを歩いていても「ろうかがくさる」と言われ、階段の手すりを持っていれば、手すりがくさるからさわるな、と全学年の男子から言われている頃でした。クラスのほとんどの男子の手があがりました。先生は「ありがとう。いじめたことは良くない。でも、今、自分から手をあげてくれて、ありがとう。」と言いました。おこられると思っていた男子は拍子抜けしたようでした。

話し合いは進み、私の目つきが気持ちが悪いか、何を考えているかわからないから気持ちがわるい、話しかけても返事をしないから無視しました、と当然の言葉が出ました。先生は、私の代わりに説明をしてくれたり、私にも悪いところがあることを男子やクラスの人全員に話してくれました。そしてお互い納得をしたのです。そして先生は男子に向かって言いました。「本当に心から悪いと思っ

ている人は、ひとりづつ、彼女の机に行って「ごめんなさい」とあやまりなさい。先生がいない時でもいいからあやまりなさい」。そして、次の日から、男子が私の机に来て「ごめんなさい、もうしません。」といいました。私もあやまりました。いじめはなくなりました。

高校について考える時になっていました。私の成績は学年順位でいうと、ビリから三番目でした。ビリじゃないのがすごいな。と思っていたら、「たいていカゼで休む人がひとりやふたりはいるから、ビリじゃないからって安心しないようにね。」と先生がいました。なんで思っていることがわかるんだらうと思いました。いい先生だと思います。

私がこの頃考えていたのは、「高校に行かないで、大学に行く！」ということでした。英語だけは、なぜか頭にはいつていったのです。日本語に直すのは、うまくできなかったけれど、英語の内容は文章を読みながら、イメージできたのです。日本語を通さないで、そのまま内容を理解していました。和訳や文法を答える学校のテストは半分くらいしかできませんでした。でも、他の科目は二問か三問できればいい方だったので、私の中では、英語の成績は充分に優秀でした。そして、担任のこの先生が英語の先生だったので、英語の授業は力が入りました。

家では、立ち仕事は無理なので、すわってできる事務の仕事がいいね、と小さい頃から言われていました。まだ世の中がどのようなしくみで動いているのか、ぜんぜん知らなかったもので、高校を受験をするのは無理だけれど、これ以上むずかしい数学や理科もできないけれど、大学というところは、

「専攻」というのがあって、専門的な勉強をするから、高校を飛ばして、大学に行けばいい。そう決めてしまいました。決めてしまったので、志望校を書く紙も、白紙のまま出しました。心配した先生は、私のところにそっと来て、「世の中は勉強だけじゃない。服装も大事。あなたは、きちっと制服を着ているから、髪の毛をちゃんとくしでとかして、ブラウスのそでもちゃんとして、面接の時には、できるだけがんばって、自分の学校の名前と、自分の名前を言いなさい。部屋に入る時には、心を落ち着けて、ノックをしっかりして、「失礼します」と大きな声でいいなさい。いいね？いじめられなくて済むように、おじょうさんが行く、女子高を受けてみよう。制服のリボンもきっちりむすべる様に練習しておきなさい。それから、こんどのテストはがんばりなさい。先生が言えるのはこれだけです。あとは、あなたががんばりなさい」。高校を出ないと大学には行けないことも教えてくれました。大検の制度は、まだありませんでした。そして、補欠で高校に合格しました。補欠なので、先生も親も、とても心配したそうです。私は意味がわからなかったもので、高校に行かなくてはならないとは思ってなかったくらいだったので、心配もあまりしないまま、高校に入りました。

私の学力は、小学校のレベルでとまっているようなものでした。小学校も、他の人のように、ぎっちりとしてしっかりと学習しなかったもので、高校には入ったものの、少し心配していました。ところが、四月の実力テストで、私はクラスの順位が九番でした。中学の先生の進路指導が適切で、私のレベルに合った高校を選んでくれたのかもしれませんが。それでも補欠だったので、そして、いつでも学年順

位がギリだった私なので、この「九番目」というのが信じられませんでした。ギリじゃないことが自信につながりました。補欠でもなんでも、勉強した人が勝ちなのだと思います。

私は勉強に目覚めました。私立の高校だったので、自分が受けた科目を選択できました。私は英語と国語を選びました。数学は一年生の時だけやり、二年生と三年生は、ひたすら、英語だけをやりました。朝補習に七時間目まである授業。そしてその後、更に補講。追試で合格点が取れるまで、同じ所を学びました。入学の時の成績順に決っているクラス分けの、トップのクラスに、三年生の時には編入しました。どうしても、大学に行きたかったのです。学校のレベルが高くはないので、トップのクラスに入っても、そのクラスの上の方においても、大学の合格はきびしいと、受験クラスの先生は言いました。そして、基礎学力がない私は、高度になっていくテストの問題を読むことが、設問の意味を理解することが、むずかしくなっていました。英語の力はあっても、それを日本語で書く時の漢字がわからなかったり、何を聞かれているのかわからないために、答え方をまちがうようになりました。たった三年前から勉強を始めた私と、小学生の時から積み上がっている人たちと、同じ所で勉強していることさえ、不思議なくらいです。それでも入試はやってきて、私は、どうしても自分が行きたい学校を受験しました。その学校は、英語で授業を受ける学校で、そこを卒業した人は、みんな、英語を使う職業に就いていました。大学に入りたいからじゃなく、仕事に就くために、私は勉強をしました。一生の中で、こんなに勉強したことはありません。体が動かないのなら、頭を使う仕事

に就くしかないのです。自分でお金をかせがなければ、ほんとうの自立ができないことを養護学校で教えられました。誰がなんと言っても、先生が無理だと言っても、目指した所に入學したいと思いました。

そして、受験の当日。緊張しすぎたのか、私は筆箱を忘れて家を出ました。受験票を忘れるのも大変なことですが、筆記用具を、まるで持たないで、会場に着いてしまいました。コンビニもありませんでした。とつさに、会場で通りかかった女の子に声をかけ、鉛筆一本と、小さなケシゴム一個をかしてもらいました。大切な予備のケシゴムをかり、テストを受けました。進路の先生からは、「あなたの成績で合格をするなら、世界中の誰でも大学に行ける。」と言われていました。すべての力を集中し、問題を解きました。結果は合格でした。生まれて初めて、うれし泣きをしました。

入學した後も、ただひたすらに勉強をしました。元々、あそんだこともなく、クラスの人とふざけたこともない私には、勉強が一番楽しい時間でした。今でもそうかもしれないです。英語で授業を受け、留学生もいる校内で、たくさんの言語をおぼえました。いじめも障害も関係ない、実力の世界がありました。

そして就職説明会の時、私は「障害者枠」というものを知ります。そういう名前は知らなかったけれど、「君は成績もいいから、手帳を持っていくなら、どこの企業でも入れるよ。」と就職課の先生がいました。私は英語の仕事ができそうな、大きな会社を選びました。面接では、お茶はこぼれてし

まうから、お客さまにお茶出しをすることはできないけれど、その代わり、英語はできます。日本語と同じくらいにできます。私をここで働かせてください。」と言いました。面接官の人は、本当にできるのかと、英語で何かしゃべるように言いました。私は自己紹介をしました。そしてそこで、働くことになりました。今、働いている会社です。何度もやめようと思ったこともありましたが、でも今までのこの積み重ねと、初めの気持ちを思い出し、続いています。いつか、中学の時の先生に会いたいと思います。高校の受験がなかったら、今の私はないからです。先生、ありがとう。私は元気です。

杉 田 知代子

昭和三十九年生まれ 会社員 静岡県静岡市在住

【受賞のことば】

学校や保健室、会社や部活。いじめや辛いトンネルの、その向こうには広い世界があることを、地球はとっても広いことを、今のその暗やみが、ひとりぼっちがすべてじゃないことをたくさんの人に知ってほしいと思いました。閉じこもったら、そこで終わってしまう。少しだけ休んだら、前に出る勇気を、私の作文を読んで、誰かが持てたらうれしいです。そして、私を育ててくれた、たくさんの人たち、本当にありがとうございました。

選 評

表題通り「頭がチーズだったから」と、ちょっとユーモラスに自分自身を評しながら、自立に向けてひとつひとつ努力を重ねてきたことが様々なエピソードで語られ感動しました。同時に、日頃私たちが当たり前と思っていることへの杉田さんの素朴な疑問がとても新鮮でした。

またこの作品には、様々な出会いが人を育てること、そのままの自分を受け入れ自分の生き方を選ぶことの大切さなど、誰にも通じるメッセージが込められていると思います。

(日向英実)